

最初にこの本を読んで、

最初に自慢してくれるはずだった

ファタおじさんに

プ ロ ロ グ 二〇一七年十月十九日

ジャシнда・アーダーンは、首相にはなりたくなかった。「首相という仕事をしつつ家族を大切にするのがどんなに難しいか、先輩たちの例でわかっているんです」二〇一四年の言葉だ。その一年後はずっとはつきり宣言した。「首相にはなりたくありません」それが党としての見解だったにせよ、個人的な発言だったにせよ、本心からの言葉だろう。

だからこそ、その後の展開には、アーダーン本人がいちばん驚いたことだろう。二〇一七年、南半球の明るい春の午後、彼女はニュージーランドの首相に選ばれる瞬間を待っていた。

目まぐるしいほどの大出世だった。比例代表で国会議員に初当選したのは二〇〇八年。当時の最年少議員だったアーダーンが、九年後の二〇一七年には当時の野党である労働党の党首になったのだ。同年初頭には、まだ若くキャリアも浅い労働党の一員に過ぎなかった。二月の補欠選挙に当選し、比例代表でなく選挙区で当選した議員となったため、首相候補となる資格を得る。その二週間後、労働党副党首の引退を受けて副党首となり、それからわずか五カ月後、党首が辞任したことにより、アーダーンが党首になった。リーダーにはなりたくなかったのに。

その時点で、総選挙までわずか七週間。アーダーンは低迷する支持率を挽回し、選挙に勝つという使命を負うことになった。党首就任時のスピーチが国民の支持を集めたのを皮切りに、気候変動に積極的に取り組む姿勢やフェイスブックでの頻繁なライブ配信が功を奏した。数十年のうちに最低

レベルだった労働党の支持率がみるみる回復し、政権与党・国民党に迫るほどの議席数を獲得した。しかし、政権を握るには他党との連立が必要だった。そのため、九議席を持つニュージールランド・ファースト党との話し合いが行われた。ニュージールランド・ファースト党のウィンストン・ピーターズが、国政を左右するキーマンになったのは、政治家のキャリアの中でこれが三度目だった。労働党および国民党（総選挙での獲得議席は最多ではあったものの、政権を得るにはやはり連立が必要だった）との話し合いは数週間にわたった。労働党との連立を選べば、少数連立政権が誕生する。しかし、ピーターズがマイクの前に立つ瞬間まで、労働党は彼がどう動くのかを知らされていなかった。ピーターズは自分の切り札をぎりぎりまで明かさなかったのだ。

オフィスでスタッフに囲まれたアーダーンは、テレビに映るピーターズをみつめていた。ピーターズは、決断を下すのがどんなに難しかったかを語りつづける。プロポーズの相手を決めかねて求愛のバラを指先でもてあそぶ騎士^{ナイト}のようだった。

スピーチの最後に「労働党との連立を選ぶ」とピーターズが告げたとき、アーダーンのオフィスは喜びにわきたった。ウイスキーのボトルをあけたアーダーンは、自分以外全員のグラスに注いだ。つわりはまだ始まっていなかったが、それも時間の問題だった。ほんの六日前——総選挙から三週間後、ニュージールランド・ファースト党との交渉中に——アーダーンは第一子の妊娠を知った。結局、母親と首相というふたつの仕事をこなすことになったのだ。

首相にはなりたくないといってから三年後、そして覚悟を決め、党首として戦いはじめて七週間後、三十七歳のジャシンダ・アーダーンは、ニュージールランドの第四十代首相になった。

ニュージーランド地図と基礎データ



面積: 27万534km² (日本の約4分の3)

人口: 約504万人 (2019年)

首都: ウェリントン 人口約21万人
(暫定値2020年)

最大都市: オークランド
人口約165万人 (2018年) *1

民族: 欧州系 (70.2%)、マオリ系 (16.5%)、
太平洋島嶼国系 (8.1%)、アジア系
(15.1%)、その他 (2.7%) (2018年) 注

言語: 英語、マオリ語、手話 (2006年以降)

宗教: キリスト教36.5%、
無宗教48.2% (2018年)

GNP: 2,052億米ドル (日本の約1/24) (2019年)

ひとりあたり 4万1,667米ドル

GNP (日本: 4万256米ドル) (2019年IMF)

通貨および、ニュージーランドドル
為替レート 1NZドル=約81円 (2021年10月15日) *2

政治体制・内政

政体: 立憲君主国

元首: エリザベス2世女王 (英国女王)

総督: シンディ・キロ
(2021年10月着任、5年の任期)

議会: 一院制 (120名、任期3年)

Contents

ブローグ 二〇一七年十月十九日 2

① ムパラからモリンズヴィルへ 6

② モルモン教との別れ 22

③ 見習い政治家 30

④ ライバル 50

⑤ 上昇気流 63

⑥ 記者会見 85

⑦ 七十二時間以内に 101

⑧ 選挙戦 113

⑨ 投票日の夜 131

⑩ 外交 144

⑪ ワーキングマザー 158

⑫ ヘレンとジャシнда 179

⑬ クライストチャーチ、二〇一九年三月十五日 201

⑭ いいときと悪いとき 234

⑮ 新しいタイプのリーダー 252

エピローグ 二〇二〇年 264

スピーチ 282
出典 313
謝辞 314

解説 伊藤詩織 316



ムルパラからモリンズヴィルへ

From
Murupara
to
Morrinsville

一九八五年の写真には、トレーラーハウスの中でっこり笑うふたりの白人の女の子が写っている。ふたりのうちひとりには明るいブロンド、もうひとりには褐色の髪。髪形は襟足^{えりあし}を長く伸ばしたおしゃれなマレットヘアだ。まわりには近所に住む十人あまりの子どもたち。グループの中で、白人はそのふたりだけ。

ジャシнда・アーダーンと姉のルイズは、ニュージーランド北島中部にある林業の町ムルパラで育った。町の人口は二千人で、その大部分は先住民のマオリであり、姉妹のクラスメートたちもほとんどがマオリの人々だった。

世の中は不公平だ

ジャシнда・ケイト・ローレル・アーダーンは、一九八〇年七月二十六日、ムルパラから車で二時間あまりの都市ハミルトンで生まれた。しかし子ども時代の思い出があるのは、ここムルパラ。

ジャシンダが五歳のとき、一家はムルバラに越してきた。父親のロス・アーダーンが警察官で、ムルバラはその赴任先である。しかし、そこはやっぱりな地域だった。トライブズメンと呼ばれるバイク乗りのギャング集団が暴走行為を繰り返すし、林業の民営化により失業者が増えていた。アーダーン一家が住む家は、警察署の向かいにあったが、それでもジャシンダは、貧困や暴力を日常的に目撃していた。ジャシンダはかつて、子ども時代の経験が、政治家としての自分の素地を作ったのだと話したことがある。「小さな子どもの心に社会的良心を植えつけることは可能です。まさにわたしの身に起こったことなのです」

もちろん、五歳のジャシンダが靴を履かずに歩きまわる子どもたちをみて、主要産業である林業が民営化されたことの影響や、中央政府の腐敗について考えたわけではない。ただ、靴を持っていない子どもたちをみて、世の中は不公平だと感じた。「当時は政治というレンズを通さずに世の中をみていましたし、いまもそういうことは多いです」彼女はのちにこんなふうに述べている。「子どもや一般市民の視点で世の中をみるようにしています。世の中は公平であるべきだ」という概念を常に頭に置いています」

幼いころのジャシンダは、ムルバラの格差問題からある意味守られて暮らしていた。地域のほかの人々より経済的に恵まれていたからだ。しかし、父親は警察官。一家に反感を持つ人々もいた。家に空きビンが投げつけられることもあったし、いわれのない暴言を吐かれることもあった。

ある日、ジャシンダは、家の裏口を出て買い物に行こうとしたとき、父親が男たちに囲まれているところに出くわした。男たちが怒っているのはひと目でわかった。父親は落ち着いて彼らに応

じ、状況を悪化させまいとがんばっていた。そして、立ちつくしているジャシンダに気づくと、「ジャシンダ、心配はいらないよ。行きなさい」といつて、男たちに向きなおった。一瞬の出来事だったが、騒ぎを穏やかにおさめようとする父親の姿はジャシンダの記憶に刻まれた。やがて国会議員になったジャシンダは、同僚や対立する政治家たちに対していつも穏やかな態度で接すること知られるようになった。

ジャシンダが七歳のとき、一家はムルパラを離れたが、この地でみたことは強烈な記憶となつて彼女の胸に残った。失業者があふれていたこと。近所の人々が亡くなり、それが自殺だったあとで知らされたこと。ある日ベビーシッターの全身が肝炎で黄色くなり、その後は一度も姿をみせなかったこと。政治とは関係なく、ただ不公平だと思つた。

民主主義的な生徒会長

一九八七年、ジャシンダの両親が子どもたちに「引越しをするよ」といつた。行き先は大都市？ いや、同じく北島にあり、ムルパラから車で二時間ほどのモリンズヴィルだった。

モリンズヴィルは大都市とはいえないが、ムルパラに比べれば大きくて広い町だ。ニュージランドという国全体の縮図みたいな町ともいえる。裕福な人々と貧しい人々が混在する町。広大な土地で酪農を行い、成功している人もいれば、そのすぐそばには外国からやってきたばかりの難民たちが暮らしている。もつとも大規模で高級な施設は（モリンズヴィル・ゴルフクラブ）で、その敷地に隣接した区画にアーダーン邸がある。釘を一本も使わず、木材を組み合わせて作られた木造住

宅で、ジャシンダの祖父が建てたものだ。

お小遣い稼ぎのために、ジャシンダはゴルフ場と自宅を隔てる柵に接して、果物の無人売店を開設した。柵の向こうに広がるゴルフコースを歩いてくるゴルフアスたちが柵越しに手を伸ばし、ひとつ二十セントのリングを取ってくれる。お代は置いてある箱に入れてもらいう仕組みで、客を信用してこそ成り立つ商売だ。グリーンのむこうには、白い雪を頂くテ・アロハ山が遠くにみえた。

モリンズヴィルにも貧困の問題はあったが、ムルバラほどの露骨な格差はなかった。それでもジャシンダは社会の不均衡に目を向けつつ、モリンズヴィル中学に入ると、問題提起の場をみつけた。生徒会だ。

生徒会室で開かれる会議で、十一歳から十三歳までの生徒たちは、ジュースやアイスキャンデーの価格がどんどん上がっていくことや、学校を中心とする半径五十メートルの区域では交通安全のために自転車に乗れない問題などについて話し合った。こうした議題を真剣に話し合いはしたものの、彼らが生徒会に参加する本当の理由はただひとつだった。授業への出席が一定期間免除されるということだ。

ただ、そうではない生徒もひとりだけいた。生徒会長のジャシンダ・アーダーンだ。ジャシンダは自身を生徒たちの代表者と考え、民主主義的なやりかたで問題にアプローチした。生徒会における民主主義など、ほかの生徒たちは意識したことなかっただろう。だれかがなんらかの問題を提起すると、それが深い考えに基づくものでなくても、ジャシンダは真剣に取りくんだ。地元のさまざまなチャリティ団体とその財政状況について独自の調査をおこない、次のマフティ・デイ（生徒

たちが学校に制服ではなく私服を着ていくかわりに寄付金を出す日）で集めたお金をどの団体に寄付するのがいいか、提案した。生徒会のほかのメンバーたちは、みな厳肅な面持ちでうなずいたものだ。ジャシンダにはリーダーとしての素質があったらしい。

ジャシンダが十代のころからこうした活動に打ちこんだのは、なにも教育熱心な両親に命じられてのことではない。純粹に自分の意志でそうしていたのだ。十二歳のときにはもう、人権擁護運動にみずから関心を寄せていた。

シャツの裾問題を解決する

四年後、モリンズヴィル・カレッジに進学したジャシンダを、もっと現実的な問題が待っていた。女子生徒がショートパンツをはいていいかどうかという問題だ。十七歳になったジャシンダは、ショートパンツ賛成派。学校には制服があつて、女子はスカート、男子は長ズボンか短パン、男女ともに襟付きのシャツと決まっていた。ジャシンダは制服についての決まりをすっかり変えてしまおうとしているかのようなふしがあった。というのも、前年モリンズヴィル高校で、シャツのデザインを変えるのに成功していたからだ。学校の理事会は生徒たちに、シャツの裾をスカートやズボンに入れるように定めていたが、生徒たちはそれに反発していた。そこでジャシンダは、裾をウエストに入れずに着られるようなデザインのシャツを制服とするように求め、それを実現させた。

理事会のメンバーは男性が過半数。生徒の参加を以前から認めてはいたものの、ジャシンダのように発言力のある生徒ははじめてだったという。ジャシンダは自分の意見をまとめたメモを持って

会議に参加し、さまざまな議題について積極的に発言した。九〇年代のモリンズヴィルにおいて、女子生徒がこのような態度をとるのはめずらしかった。というより、モリンズヴィルであれどこであれ、性別は関係なく、このような生徒は少数派だったのだ。

ジャシンダは理事会だけでなく学年会でも実力を発揮した。活動のリーダーだったわけではない。学年長はヴァージニア・ドーンソン。オックスファム（飢餓・貧困・不正の根絶を目的とするNGO）やユニセフでの活動を経て、いまはミャンマーのニュージールランド大使館で開発協力機構のトップに立つ人物だ。ジャシンダは学年のリーダーになるのではなく、一生徒としての立場を重視した。本当の変化をもたらす力はあると信じていたからだ。十数年後、われわれは彼女のその姿勢をふたたび目撃することになる。三十代の国会議員として、さまざまな場面で「首相にはなりたくない」と発言した。首相としてではなく一議員としてのほうが力を発揮できると考えたからだ。

国民党の票田で

モリンズヴィルは酪農がさかんで、一ヘクタールあたりの乳牛の頭数が世界一なのが町の自慢だ。多いときには、ニュージールランド最大の企業である乳製品会社フォンテラ社の工場で一日あたり百万リットルの牛乳が生産される。オークランドから一号線を南へ二時間行き、ごくありふれた曲がり角で左に曲がる。道路は次第に細くなり、やがてモリンズヴィルに到着する。携帯電話の電波はいったん途切れるが、町に着けば復活する。二〇〇八年に初当選を果たした直後のスピーチで、ジャシンダは自分が急進派であるという風評を否定した。「わたしはモリンズヴィル出身です。

それだけいえばわかっていただけるでしょう。モリンズヴィルは、ホールデンやフォードではなくトヨタに乗っているだけで急進派と呼ばれるような土地です」

父親のロスは、モリンズヴィルを含むマタマタピアコ地区の警察で副司令官を務めていたが、その後、ハミルトンへ移り、捜査官として犯罪捜査に携わった。母親のローレルはモリンズヴィル・カレッジのカフェテリアで働いていたが、当時の生徒たちにきいたところによると、ジャシンダも姉のルイーザも、そのおかげでランチタイムに得をすることなどなかったらしい。

マタマタピアコは昔からの国営農業地区である。したがって、モリンズヴィルは、保守政党である国民党の票田だった。国内には同様の町がいくつもあり、これまでのどの総選挙でも、国民党を支持してきた。九〇年代のモリンズヴィル・カレッジの生徒たちは、デイヴィッド・ロンギ首相の施政下で学生時代を過ごした。ロンギ首相は労働党員で、群を抜いた弁舌家。国民的人気を博した首相であり、非核政策をとったことで有名だ。イギリスのテレビ番組で口にした、論敵の息からウランのにおいがする、という発言も話題になった。ニュージーランド全国でみれば、政治に関心のある若者たちのスター的存在だったが、モリンズヴィル・カレッジにおいては敵視されていた。各家庭の食卓で、両親が彼を悪くいうからだ。ところがアーダーン家は違った。母ローレルの実家は根っからの労働党支持者だったからだ。

真面目が服を着ている高校生

ジャシンダがモリンズヴィル高校^{*}に入学したのは一九九四年。モリンズヴィルでの中学卒業後の

進路といえば、この学校しかない。裕福な家庭の子どもたちは三十キロ離れたハミルトンまで行くが、それはほんのひとにぎりだ。モリンズヴィル高校の一年生は七十人から百人。町のティーンエイジャーのほぼすべてが通っているの、その内訳は、町全体の縮図といっている。大部分は、マオリ語でパーケハーと呼ばれる白人入植者の子孫。少数派の中には、増加しつつあるマオリと、農業を通して強力なコミュニティを作るインド系の人々、ニュージーランドにやってきてすぐにこの地に住居を与えられたカンボジア難民たちがいる。当時の生徒や教職員にきいた限り、ミクロネシアやポリネシアの出身者はひとりもいなかった。

モリンズヴィルでは全住民が知り合い同士だ。家族のこともみんなが知っている。そういう意味では、ジャシンダはいつも姉のルイズとセットで認識されていた。ルイズはジャシンダに比べれば、クールな生徒だった。少し乱暴な言葉でいいかえれば、生徒会活動にはあまり興味がないうこと。現在に至るまで、ルイズはニュージーランドのマスコミに取りあげられることがほとんどない。世界的に有名な首相の姉であるにもかかわらず、いまなお謎めいた存在だ。

ジャシンダはクールではなかったかもしれないが、だからといってダサかったわけでもない。元クラスメートたちにきけば、みながそう即答する。ただ、若者たちが「ダサイ」と考えるようなことを、ジャシンダはあれこれやっていた。そのひとつは学校の理事会の生徒代表。それを一年だけでなく二年もやったのは、後にも先にもジャシンダひとりだけだという。ディベート大会にも参加した。スピーチ大会にも参加し、優勝した。アルコールは飲まなかった（訳注…ニュージーランドでは、親や法定後見人の同伴・責任のもとでの飲酒に最低年齢制限はない。購入は十八歳から）。十年後には、SN

Sで何千人ものフォロワーがいて副業でDJをやっているクールな若手政治家として知られるようになるものの、高校時代は、真面目が服を着ているような生徒だった。優秀で人気もあったとはいえ、真面目すぎると思われていただろう。

リベラル派の恩師ファウンテン

当時のジャシンダを覚えている人はみな、*いい人*だったという。けっしてほめ言葉とはいえない。*いい人*というのはつまらない人という意味だと考える人が多いし、ジャシンダもそうだったのかもしれない。実際、同学年だったのに彼女をまったく覚えていない人もたくさんいる。よく覚えているというのは理事会関係者ばかりだ。理事会の生徒代表であり、ディベート大会やスピーチ大会で活躍した生徒として、ジャシンダのことを覚えているわけだ。そういった人々の中で、ジャシンダの人生にとって最も重要な意味を持った人物が、グレガー・ファウンテン氏だ。

ファウンテン氏は一九九五年、二十二歳でモリンズヴィル・カレッジの教壇に立った。首都ウェリントンで育ち、南島の中心都市クライストチャーチの教育大学を出てすぐに、モリンズヴィルという田舎町にやってきた。担当は社会学と歴史。対話型の授業をしていたことが、当時の生徒たちの記憶に残っている。単に教科書を読むのではなく、歴史上の出来事を再現してみんなで体験するような授業だったという。授業でガンジーを取りあげたときは、ファウンテン氏はガンジーを真似た服装で教室にあらわれた。一九九五年だからできたことで、いまならなにかと問題になったかもしれない。しかしいずれにしても授業はうまくいった。ファウンテン氏は地元の政治の状況や政治

運動に興味があり、また、圧倒的に保守的な学校の中で、自分がリベラル派であることを公言していた。都会出身者ならではの自由な感覚と熱意は、またたくまに学生に伝播したし、とくに十四歳のジャシンダ・アーダーンに大きな影響を与えた。

もともと政治に興味のある生徒にたいしてだけでなく、そうでない生徒たちにも、惜しみなくその豊かな知識を与えつづけた。二〇一七年の総選挙直後、テレビの有名司会者であるマーク・セインズベリのインタビューを受けたジャシンダは、恩師についてこんなふうに語っている。「なにか意見を持ったときは必ず、その意見の根本が正しいかどうかを考えろ、と教わりました。自分はどうしてそう思うのか、その発想はどこから来たものなのか、それを考えるようにと。わたしはもの考えかたをファウンテン先生に教わったんです」

先住民側からみた歴史を教える

ファウンテン氏の授業は歴史全般に関するものではあったが、とくにニュージーランドの歴史を全方位的にとらえることを重視していた。植民地はどこでもそうだが、入植者側からみた歴史を教えることが多い。たとえば、クック船長が十八世紀にニュージーランドにやってきて、英国国王が先住民のマオリとのあいだに条約を結び（ワイタンギ条約）、ヨーロッパから来た人々とマオリが友好的に暮らせるようににした、といわれる。両者のあいだに紛争や衝突が絶えなかったという事実はあまり伝えられていないのだ。土地の所有権をめぐる、マオリとヨーロッパ人とのあいだには戦争が何度も起こったり大虐殺が企てられたりした。ファウンテン氏は入植者側だけでなく先住民

側からみた歴史も教えた。ジャシンダを含む一部の生徒は、それを熱心に勉強した。

タイミングもよかった。一九九五年、一九世紀のマオリ戦争時の土地の不正取得について、政府はワイカト・タイヌイのマオリの人々に公式な謝罪を行った。ジャシンダはそのとき十五歳で、ファウンテン氏の歴史の授業をとっていた。そして、事実をより詳しく知りたいと考えた。のちにファウンテン氏は、当時のジャシンダの努力についてこう話している。「ジャシンダは、自分がどのような価値観を持って生きていくべきかを考え、それを自分なりに作りあげていこうとしていました。タイヌイの和解について、ふたりで話をしたのを覚えています。彼女はほかの生徒たちとは違って、広い視点で歴史を眺めていました」

〈独裁者にFaxを〉

ジャシンダとファウンテン氏の価値観には相通じるものが多かったという。ファウンテン氏はモリンズヴィル・カレッジに社会運動のグループをいくつも作り、ジャシンダはそれらすべてに参加して熱心に活動した。そのひとつが、一九九七年に発足した〈人権活動グループ〉だ。顧問はファウンテン氏。多くの学校と同じで、彼らの活動は社会を変えることこそできなかったが、少なくともその声は大きかった。他国における人権侵害の例をあげてそれを糾弾し、^{きゅうだん}刑務所の囚人たちの更生に協力した。〈独裁者にFaxを〉という企画を立てて生徒たちに働きかけ、世界中の独裁者たちに非難の手紙を書いた。

一九九七年の学年アルバムには、〈人権活動グループ〉に属する二十六人の生徒たちの写真があ

る。その中心にはファウンテン氏。右隣には学年長のヴァージニア・ドーソン（ジャシンダの親友だった。11ページ参照）、左隣にはジャシンダが写っている。その写真におさまっているほかの生徒たちに話を聞いても、自分がそのグループに入っていたことや、そのグループがあったこと自体を覚えていない人がたくさんいた。ファウンテン氏が無関係な生徒に声をかけて写真に入らせ、グループを大きくみせたのだという証言もあるほどだ。実際、〈人権活動グループ〉で活動していたのはこの三人だけだったようだ。

とはいえ、ファウンテン氏は人気教師だった。モリンズヴィル・カレッジの歴史の履修生はほとんど増えていった。もちろん、生徒たちが急に歴史好きになったせいではない。しかし彼はもともとモリンズヴィルに長居するつもりではなかった。彼という魚にとってモリンズヴィルという池は小さすぎたのだ。ジャシンダと同じで、もっと大きなことをなすとげる運命にあったのだろう。三年間の在籍中はずっとジャシンダに教えていたが、一九九七年度が終わると、ハミルトンの私立学校に移った。その後もさまざまな学校で教鞭をとり、二〇一八年にはウェリントン・カレッジの校長になった。自身の母校でもあり、ニュージールランドではいちばんの名門校だ。就任後最初に取りかかったのは、校訓の改定だった。

グレガー・ファウンテン氏がモリンズヴィル・カレッジを去ったとき、ジャシンダの卒業まではあと一年だったが、ファウンテン氏は、ジャシンダの大きな飛躍を予見していたという。「世界を変えることのできる人間だと確信していました」

フィッシュ・アンド・チップス店でのアルバイト

しかし、世界を変える前に、ジャシンダは小さな町に変革をもたらすべく奮闘した。まずは、S A D D（飲酒運転防止学生連合）のグループリーダーになった。世界のどの国でも、地方での飲酒運転は深刻な問題だ。夜になると電車やバスが終わってしまいうし、警察官の数も限られている。しかも娯楽が少ないから、気軽に飲酒運転をしてしまう。事故を起こしても運がよければ大事には至らず、農場のフェンスに車がつっこむ程度ですむ。モリンズヴィル・カレッジのS A D Dはこの状況の改善を訴え、校庭で、実際に起こった事故を再現してみせた。派手で悲惨なパフォーマンスをすることで、生徒たちや地域の人々の飲酒運転をやめさせようとしたのだ。それだけではない。普段から酒を飲まないジャシンダは、酒を飲んだ生徒たちが無事に帰宅できるよう、みずから行動した。一九九七年の学校主催ダンスパーティーのあと、生徒代表かつS A D Dのリーダーとして、パーティーが終わったあとの生徒たちのためにバスを手配したのだ。バスに乗れなかった生徒たちは自分の車で家まで送りとどけた。（訳注…当時は十五歳で普通自動車免許を取得できた。現在は十六歳から）

十年後、国会議員となったジャシンダは「新卒政治家」と揶揄されることがよくあった。政治家としてのキャリアしかない人間がどう国を動かすのか、というわけだ。この議論はいまもよくなされる。多くの政治家は、ほかの分野でさまざまな社会人経験を積んでから政治の世界に入るからだ。しかし、ジャシンダのことをそんなふうに批判する人たちが見逃していることがひとつある。たしかにジャシンダは社会人として政治家以外の仕事をしたことはないが、ティーンエイジャーの

ころには驚くほどさまざまなアルバイトを経験している。たとえば金曜の夜はフィッシュ・アンド・チップスの店。クラスメートたちがどこかの畑で酒を飲んで楽しんでいるあいだに、〈ゴールデン・キウイ〉という店の、一週間でいちばん忙しい夜のシフトに入っていた。

この〈ゴールデン・キウイ〉は、国民食であるフィッシュ・アンド・チップスのレストランで、一九六三年からコヴィック家が経営している。そのおよそ三十年後、店主を務める息子のグラントは、母親の車で履歴書を持ってやってきた十四歳のジャシンダをアルバイトに採用した。当時の〈ゴールデン・キウイ〉は昔ながらのスタイルにこだわっていた。フィッシュ・アンド・チップスのレストランはだいたい前からテイクアウト専門店が主流になっていたが、ここでは簡素な椅子とチェック柄のテーブルクロスを使ったイートインスタイルを続けていたのだ。ジャシンダの仕事は客の注文を取って料理を出したり、テイクアウト希望の客のために料理を新聞紙で包んだりすることだった。母親のローレルは経験不足な娘を心配するあまり、キャベツを買ってきて、新聞紙で包む練習をさせたという。

フィッシュ・アンド・チップスの店でのアルバイト経験は、ジャシンダには大きな意味のあるものになった。というのも、ニュージールランドでは、揚げた魚とジャガイモを新聞紙で包む仕事こそ、人々の暮らしにもっとも根づいたものと認識されているからだ。

ニュージールランド首相になりそう

モリンズヴィルでのジャシンダの暮らしぶりは、彼女がいかに人並みはずれた人物だったかを示

すものではなく、むしろその逆だった。学校の成績はよかったが、天才といわれるほどではなく、放課後は近所の店などでアルバイトをした。モリンズヴィルの人々に彼女の印象をきくと、みんなが口を揃えて「なんでも無難にこなすタイプだったね」という。

卒業アルバムをみると、ジャシンダの名前のあとにはたくさんさんの記載がある。デイベートクラブで活躍、スピーチ大会優勝、論文コンクール準優勝、科学コンクール優勝。理事会に出席しているときのジャシンダの顔写真もある。サングラスをかけて、髪にはブロンドのハイライト。クールではないが、けっしてダサくはない。

意外なのは、最上級生のときのバスケットボール・クラブでの写真だ。とはいえ、ジャシンダ・アーダーン首相がスポーツも得意だったとわかってても、驚く人は多くないだろう。なんでもできるがんばり屋、というイメージが強いからだ。しかし実際のところ、スポーツは彼女の弱点だったらしい。学生代表として理事会に出席し、さまざまな意見をバランスよく取りあげて交渉するのは得意でも、手足をバランスよく動かすのは難しかったのだろう。バスケットボール・クラブはお遊び的なものだったし、姉のルイーザとバドミントンでダブルスを組んだこともあるが、テニスのヴィーナスとセリーナのようなスーパースター姉妹にはなれなかった。それでもジャシンダは真剣にプレイしたし、後年は女性のスポーツ参加を奨励する政策をとることになる。そういう真剣さや熱意は、なにかにつけ無関心を装う現代ニュージーランド人にはよしとされないが、ティーンエイジャーのころからジャシンダがそれらを大切にしていたことは間違いない。

一九九八年の理事会で、十七歳のジャシンダは、女子がショートパンツをはいて登校することを

認めてほしいと訴えた。ジャシンダ自身はスカートが好きだったが、それはまた別の話。生徒代表として、生徒たちの希望を実現できなかった。長時間の会議を何度も重ねて、とうとう保護者や教職員の説得に成功した。田舎の古い学校の制服の決まりを、二年間で二度も変えさせたのだ。ジャシンダ自身がショートパンツ姿で登校することは一度もなかったが、現在のモリンズヴィル・カレッジには、ショートパンツで登校する女子生徒がたくさんいる。

一九九八年の終わり、卒業を間近に控えたジャシンダとクラスメートたちは、生徒たちにさまざまな賞を与えることにした。〈ベストユーモア賞〉、〈ベストドレツサー賞〉、〈ベストフレンド賞〉、〈ベストカップル賞〉などを投票によって決めるのだ。同時に将来の予測もした。不名誉な賞をもたらった生徒もいたが、将来を予測された生徒は三人しかいなかった。ひとりにはジェレミー・ハブグッド。最初に億万長者になるだろう、との予測だった。そして、いちばん成功するだろうといわれたのは、学年長のヴァージニア・ドーソン。ニュージールランド首相になりそうだといわれたのは？ もちろんジャシンダ・アードーンだ。

*訳注…ニュージールランドでは、日本の高校、及び総合大学（university）進学のための予備教育機関、単科大学などがまとまってひとつの学校となっていることが多く、「カレッジ（college）」と総称するが、わかりやすくするため、ここでは「高校」「カレッジ」（高校課程卒業後および学校全体を指す）と書き分けている。

次の立ち読み箇所続きます

その夜は上機嫌な人がたくさんいた。ニュージーランド国民は変化を求めて投票し、それを手に入れようとしている。与野党どちら側の評論家も、アーダーンが首相になることを喜んでいた。その夜遅く、緑の党の党首ジェイムズ・シヨーがマスコミに話したところによると、緑の党の党内投票の結果、圧倒的多数が労働党への閣外協力に賛成したとのこと。翌朝、党員集会にあらわれたアーダーンは、スタンディングオベーションで迎えられた。「変化を起こす政府を作りましょう」アーダーンは党員たちにいった。「だれにでも自慢できるような政府を作りましょう。いまこの瞬間をあとで振りかえったとき、誇らしさで胸がはちきれそうになる、そんな政府を作りましょう」

連立の条件として、アーダーンはピーターズに副首相の座を提示し、ピーターズはそれを受けた。加えて、外務大臣と競馬担当大臣も兼任することになった（ピーターズは競馬の大ファンだった）。また、ニュージーランド・ファースト党からは四人が入閣。議員が九人しかいないことを考えると、クーデターでも起こしたのかというほどの割合だ。緑の党は、入閣こそしないが大臣職を

与えられた議員が三人（訳注…ニュージーランドには、内閣の構成員とまらない。閣外大臣が存在する）。閣外協力という約束のとおりだ。

百日計画で実現させた政策の数々

仕事が始まった。アーダーンは百日計画を立てて、それを発表した。政府として最優先で取り組む政策がリストアップされている。一年間の無償の高等教育を二〇一八年から始めること。国民党が公約していた税額控除をとりやめて、そのかわり、年金生活者と、その扶養者たちに冬季燃料手当を支給すること。産休手当を増額すること。子どもが生まれた家庭には、赤ちゃん手当で週六十ドルを一年間支給すること。外国人による投資目的の住宅購入を禁止し、住宅価格の高騰を食いとめること。

しかしなにより重要なのは——言葉には出さなくても、だれもが考えていることだった——連立政権を無事に運営していくことだ。獲得議席数が最多ではない政党による連立政権ができたのは、ニュージーランドがMMPシステムを採用してからはじめてだ。しかも、労働党と手を組んだ二党はたがいに対立関係にある。アーダーンと労働党が最初の百日間になにをどこまで成しとげるつもりだったにせよ、周囲には、いまにも連立が瓦解するのではないかと、息をつめて見守っている人がたくさんいた。危険をはらんだ政権のトップに立っている以上、アーダーンには少しのミスも許されない。彼女はいつもおなかをさすりながら、頭をこつこつ叩いていた。ひとつへまをするだけで、すべてがひっくりかえる。そうならないとしても、この三党の連立がどこまでうまく変化を起

こせるのか、という疑問の声もあちこちで起こっていた。ある解説者は「負け犬連立政権」とまでいつていたほどだ。

アーダーンは周囲からのこうしたコメントを公然と一蹴し、百日計画のリストに集中して取り組んでいくつもりだといった。実際、それをやりとげたといってもいいだろう。産休と育児休暇期間が延長され、燃料手当てと子ども手当てが導入され、二〇一八年一月からは高等教育初年度の無償化がはじまった。海外の投資家による中古住宅の売買を禁止する法律もできた。公営住宅の売却計画も中止された。労働党は水道税の導入を進めようとしたが、ニュージールランド・ファースト党との交渉中に頓挫した。低所得家庭の学生に与えられる教育手当てと生活費ローンは週五十ドル増額された。この学生向けの手当て増額は、家賃を払いながら勉強する学生たちが経済的負担に苦しんでいるのを理解してくれたとして、当初は喝采を得たものだが、その後の調査により、学生の収入が増えたことを知った大家や地主がすぐに賃料を上げたことがわかった。

はじめの百日間に政府が取り組んだ政策のうち、もつとも大きな、しかしその成果が目に見えないものがふたつあった。税制改革の作業部会を作ることと、〈キウイ・ビルド〉の設立にとりかかったことだ。税制作業部会の仕事は、今後導入できそうな新しい税制にはどんなものがあるか、調べること。中でもとくに差し迫っているものは、キャピタルゲイン課税だ。調査には何カ月もかかるが、いい結果が出るであろうと予測することはできた。若い有権者たちはとくに、自分の生まれ育った街で将来家を買うのは無理だと諦めているほどの状況だからだ。では、〈キウイ・ビルド〉とはなにか。労働党は、十年以内に安価な住宅を十万户建てると約束した。十万户といえはかなり

の数だ。その政策を支持した人々でさえ、本当に実現できるのかと半信半疑だった。しかし労働党は、絶対にできるという自信を持っていた。そして、この政権の旗じるしのような主要政策の第一歩として作ったのが〈キウイ・ビルド〉というわけだ。

オーストラリアとの日帰り外交

アーダーンにとってのはじめての経験もいろいろあった。首相に任命されてから二週間もたたないうちに、外交の手腕を問われる場面に出くわした。オーストラリア首相のマルコム・ターンブルとの会談の席だ。ナウル島（ナウル共和国）とマヌス島（パプアニューギニア独立国）には、オーストラリアに受け入れを拒否されたさまざまな国・地域からの難民六百人が留めおかれ、劣悪な環境での暮らしを強いられている。隣国のことではあるが、ニューギニアランドの人々は彼らを助けたと考えていた。国民の過半数が難民を受け入れてもいいと考えていることが二〇一七年の世論調査でわかっていった。二〇一三年、当時の首相ジョン・キーは、オーストラリアのジュリア・ギラード首相に対して、ニューギニアランドは百五十人の難民を受け入れる用意があると提案したが、結論が出ないままになっていたのだ。アーダーンがふたたび申しでた格好だ。リスクがあることはわかっていた。オーストラリアの移民政策にケチをつけたと思われるかもしれない。しかもこれは、アーダーンにとって、首相になってはじめての外交の場だ。それでもあえてこういった。「オーストラリアが抱えている問題に手をお貸しすることもできますよ。同じ人間として」結局、この日帰り外交はうまくいった。ターンブルはアーダーンの申し出を受けなかったが、アーダーンは、重要な

問題に対する態度を明確にしつつ、貿易パートナーであるオーストラリアとのあいだに壁を作ることなく帰国することができた。

A P E C と つ わ り

そのあとは、首相としてはじめて国際サミットに参加した。ベトナムで開かれたA P E C エイペック（アジア太平洋経済協力）だ。その年のはじめ頃には、ひとりでマウント・アルバート選挙区の戸別訪問をしていたアーダーンにとっては、警護が六人もついてきたことが驚きだった。食べ物毒見済みのものしか出されないし、現地の人々が歓迎の即席のハカ（訳注…マオリの伝統的な舞踊）をはじめると、警護チームがアーダーンの前に出て壁を作ろうとした。悪気はないとわかっていても、アーダーンにはショッキングなことばかりだった。サミットでは、他国のリーダーと簡単な情報交換をするチャンスがある。その縁をもとに、将来なにかの分野で協力関係を作ることができるかもしれない。そこで、アーダーンは招かれた会合にはなるべくすべて出席するようにした。ただ、困ったことに、予想外な形で首相になったことや、世界でもっとも若い女性の国家元首だということから、アーダーンと話をしたがる人がたくさんいた。人脈作りは昔から大得意だったが、連日の朝食ミーティングには胃がやられてしまう。つわりも始まっていた。

ウィンストン・ピーターズが決断を公表した夜、ウィスキー好きで知られるアーダーンが、一世一代の瞬間を祝うウィスキーをひと口も飲まなかったことに、だれも気づいていなかった。気づいたとしても、なんとも思わなかったのだろう。アーダーンはもともとたくさん飲むタイプではな

い。あの日飲まなかったのは、ピーターズとの交渉をしている時期に妊娠がわかったからだ。アーダーンはだれにも——いちばん親しい同僚にも——そのことを話さず、普段どおりに仕事を続けた。このときも、各国の元首たちと話しているあいだ、こみあげてくる吐き気を必死にこらえていた。

ベトナム滞在中、アーダーンは非公式の場でトランプ大統領にはじめて会った。さまざまな論争のもとになるアメリカ大統領の印象をのちにきかれて、アーダーンは如才なく、しかし手厳しく答えた。「裏表がないですね。マスコミがそばにいないときも、マスコミの前にいるときとまったく同じ人です」

外交は慎重かつ無難にこなしたものの、最初の百日が過ぎる頃には、アーダーン率いる連立政権の歩みはやけにのろろしているようにみえた。アーダーンを支える人材の力不足だ。財務大臣のロバートソンはその役目を有能にこなしているものの、ほかの多くの大臣は、はじめての仕事にすぐには慣れることができなかったらしい。そんな中で政権が瓦解しなかったのは、それだけでも立派なものだ。

ワイタンギの日とその意味

アーダーン政権の最初の百日間を解説者たちが振りかえっているとき、アーダーンはノースランド（北島の北端地域）のワイタンギを訪れていた。一八四〇年二月六日にワイタンギ条約が結ばれた場所だ。

ニュージーランドの人々は毎年二月六日を（ワイタンギ・デー）として祝う。だが、[〃]祝う[〃]という言葉を使うのは間違っているかもしれない。ワイタンギ・デーは、イギリスの入植者たちが君主に代わってマオリの首長たちと条約を交わしたことを記念する日だ。ニュージーランドの主権について取り決める文書だったが、署名をしない部族も多数いた。

条約に署名した首長たちは、土地の所有権や統治権はほとんど変わらないと考えていた。マオリ語のカワナタング（統治）という言葉が、主権[〃]という言葉の意味の英語に訳されたことから（もちろん理由はそれだけではないが）、入植者がマオリの土地を奪うことが正当化されてしまった。条約締結から百七十八年間で、数多くの権利侵害が起こった。マオリの人々は不当に投獄され、貧困や病気に苦しみ、教育を受けられず、土地を奪われた。マオリの人々にとっては、ワイタンギ・デーは不平等の歴史を象徴するものであり、抗議活動が起こることもある。

政界のリーダーたちにとって、ワイタンギ・デーは厄介な日だ。一九九八年、当時は野党の党首だったヘレン・クラークは、条約の署名がおこなわれたテ・ティイ・マラエでのスピーチを妨害された。マオリの社会では、どんな状況であれ、女性がマラエ（集会場）の前に出てスピーチするのは許されないからだ。クラークは不満をあらわにしたが、同様にスピーチを許されなかったのはクラークだけではない。スピーチの可否を決めるのはマラエの役員たちで、二〇一六年にはジョン・キーがテ・ティイ・マラエでのスピーチを禁じられ、二〇一七年にはビル・イングリッシュも同じ扱いを受けた。役員たちはこれらの件を単なる誤解によるものだと説明したが、政治家たちはこれを冷遇だと解釈した。だったらもういいとばかりに、彼らは別の場所でワイタンギ・デーを過ごす

ことにした。

マオリ党の結成

一般的なニュージールランドの選挙区（たとえばオークランド・セントラルやワイカトなど）のほかに、マオリの地域にも選挙区が七つある。投票するのはマオリの人々のみ。これまで、これらの議席はほとんど労働党が獲得してきた。一九九九年と二〇〇二年は七議席すべてが労働党。しかし二〇〇四年には、クラーク政権が定めた前浜・海底法（99ページ参照）により、労働党とマオリの關係に亀裂が入った。一九八九年からは、ワイタング条約を判断基準として、盗まれた土地や財産をマオリに返還する動きがある。条約によると、前浜や海底の土地はマオリが先祖代々受け継いだものであることを否定する理由はないのだが、この前浜・海底法は、マオリの人々にはそうした土地の所有権はないと定めている。個人所有されている海岸の土地をのぞいて、それらの土地は英国君主に所有権がある。例外とされた海岸の土地というのは、いうまでもなく、裕福な非マオリの人々のものである。人種間の不平等を助長する法律で、マオリの労働党議員であるタリアナ・トゥリアは、自分の所属する党が制定しようとしている法律であるにもかかわらず、反対票を投じた。その後彼女はマオリ党を結成。それまで労働党に入っていた多くのマオリ票をさらっていった。二〇〇四年のワイタングは緊張に満ちていた。

二〇〇五年、労働党は七議席持っていたマオリ選挙区の議席を五つ失い、それを取り戻すのには苦労した。一回の選挙ごとにひとつかふたつつ取り戻し、二〇一四年の選挙でようやく六議席に

なった。

二〇一七年の選挙では、アーダーンがデイヴィス（デイヴィスはマオリ選挙区の議席を持っていた）と組んだのがよかった。七議席すべてを取りもどし、マオリ党は議席ゼロ。しかも政党票が五パーセントを切ったので、二〇〇四年の結党以来はじめて、議会に議員をひとりも送りこめなかった。労働党が作った法律がきっかけで生まれたマオリ党が、労働党によって姿を消したわけだ。

ワイタンギで異例の五日間

二〇一七年の終盤、何年にも及ぶ敵対と衝突の歴史を経て、二〇一八年以降のワイタンギ・デーの行事は、ワイタンギ・トリートイー・グラウンド（博物館）にあるテ・ワレ・ランガという建物に場所を移しておこなうことが決められた。ここは柱に彫刻を施した集会所で、一九四〇年、条約締結後百年を記念して建てられた。前の場所よりもニュートラルな性質の場所とっていいだろう。アーダーンにとっては都合がよかった。このときにはすでに妊娠を公表していたので、何事もなくこの訪問を終えたかった。

前例のないことだが、アーダーンは二月六日までの五日間をワイタンギで過ごした。国会議員がワイタンギに行くとしたら、たいていは日帰りだ。午前中にちよつと訪ねて、すぐに街に戻ってしまう。ノースランドは国の中でも経済状態がもっとも悪い地域だ。多くの人が、この年のアーダーンの行動を、ただ政治やビジネスの要人とだけ会えればいいのではなく、マオリのすべての人々としっかり向きあいたいという気持ちを表現するためのものだろうと解釈した。

変わったのはアーダーンのやりかただけではなかった。場所が変わったことで対応もこれまでとは変わった。アーダーンは、集会所テ・ワレ・ランガのポーチでスピーチをすることを許された。ここでスピーチを許された女性の首相はアーダーンがはじめてだし、妊娠中の首相がワイタングを訪れるのはじめてだった。

一九九八年にクラークのスピーチを妨害した女性ティテファイ・ハラウィラが、アーダーンの手をとって伝統的なポフィリ（歓迎式）にエスコートした。

毎年のワイタンギ・デーでは、夜明けの礼拝のあと、首相を含む政府要人たちが、ワイタンギ近くのコプソーン・ホテルでマオリの首長たちといっしょに朝食をとる。アーダーンはほぼ一週間をかけてさまざまな部族の首長たちと会うことができたので、今度は一般のマオリの人々と朝食会がしたいと考えた。ワイタンギ・デー実行委員会を動かしてホテルでの朝食会をとりやめ、地域の人々のためのバーベキュー大会を企画した。アーダーンとほかの大臣たちが肉を焼き、参加者たちにふるまった。

そんなわけで、二〇一八年のワイタンギ・デーでは、アーダーンと大臣たちは、おそらく四百人くらいの人々が訪れることを想定して、八百人ぶんのバーベキューの準備にとりかかった。アーダーンは人々に簡単な挨拶をした。「今日は地域のみなさまとの触れ合いの日にしたいと思い、ホテルのかしこまった朝食をとりやめました。わたし、ベーコンのサンドイッチのほうがいいと思います」デイヴィス、リトル、その他の閣僚たちと同じエプロンをつけて、地域の人々のためにベーコンやタマネギを焼いた。国民に尽くすのが政府の役割、という考えかたをわかりやすい形で実演し

たのだ。前日のテ・ワレ・ラナンガでの歴史に残るスピーチでも、同じ思いを口にしていた。「ノースランドの美しい景色をみたり、丁寧なおもてなしをされたりするためだけに、ここに来たのではありません。ここでやるべきことがあるのです。たくさんのマヒ（仕事）をしにきました。それは、みんなでもとにやらなければできないことばかりです。この五日間、わたしたちは教育、健康、雇用、道路、住宅について話し合いました。これから、話し合ったことを行動に移さねばなりません」

首相としてはじめてのワイタンギ訪問だった。アーダーン政権が生まれてからわずか三カ月。手応えを感じたアーダーンは、翌年以降も同じことをさせてほしいといった。「三年の任期中、毎年ここに戻ってきます。そのとき、どうかわたしたちに尋ねてください。わたしたちの仕事がどこまで進んだか。あなたたちフアナウ（家族）の威厳をどこまでとりもどすことができたか。タマリキ（子どもたち）の貧困をどこまで解決したか。ランガタヒ（若者たち）の雇用が改善したか。わたしたちに尋ね、わたしたちに責任を問うてください。わたしはいつか、自分の子どもにいいたいのです。わたしは、自分がここに立つ権利を、自分の努力によって手に入れたのだと。そのためには、みなさんにわたしの仕事ぶりをみてもらい、認めていただかなければなりません」

アーダーンのワイタンギ訪問は、あらゆる面で成功だったと評された。到着したときよりも帰るときの方が人気者だった首相は、アーダーンがはじめてだっただろう。あるマオリの解説者はこう述べた。「ワイタンギに新しい風が吹きました。黙って耳を傾け、悲しい過去に敬意をもって向きあってくれただけで、人々の心は落ち着きました。ものを投げつけようとする人もいません。こ

んな日が来ることを、いつたいだれが予想できたでしょうか？」

女王の晩餐会で、カフ・フルフルを着け乾杯の挨拶

政府に責任をとらせてほしいといったアーダーンは、それを実践することになった。

ワイタング・デーから二カ月後、アーダーンはイギリス連邦女王エリザベス2世に会った。予定がびつりの「関係構築」ツアーを企画してヨーロッパ全土をまわり、各国のリーダーたちと面会した。ロンドンでは、カナダの首相ジャスティン・トルドーとともにステージに立ち、ロンドン市長サディク・カーンの司会により、ティーンエイジャー相手のQ & Aセッションをおこなった。「人はみな平等であるべきと思う人は手を挙げてください」というと、客席の若者全員が手を挙げた。「みなさんはフェミニストということですね」フランスのエマニュエル・マクロンやドイツのアンゲラ・メルケルとは、公式の個別会談をおこない、貿易協定や地球温暖化や教育について話合った。イギリス女王の晩餐会にも招かれ、イギリス連邦各国のリーダーたちと会食や会議をした。

この晩餐会の前に、ロンドンを拠点とするマオリ文化グループ、ヌガティ・ラナ・ロンドン・マオリ・クラブから、マオリの伝統的衣装を借りることができた。鳥の羽根で飾ったマントのようなもので、カフ・フルフルと呼ばれる。カフ・フルフルとコロワイ（別のタイプのマント）は、特別な人物や特別な場面のためのものだ。たとえば一九五四年にエリザベス女王のために作られたものもあるし、その年、ニュージーランドでもっとも活躍した人に与えられるニュージーランダー・

オブ・ザ・イヤーのためにデザインされ、作られたものもある。それを着る人が持つ「マナ」と呼ばれる価値「徳」や「品格」のようなもの」をあらわすための衣装だという。

バックingham宮殿の廊下を、ゲイフォードはタキシード姿で、おなかの目立ってきいたアーダーンはドレスにカフ・フルフルという姿で、歩きはじめた。その姿はすばらしく印象的で、辛口の文化解説者でさえ感動せずにはいられなかった。その衣装を選んだことはいろいろな意味で大胆な選択ではあったが、二世紀前にアオテアロア（マオリ語でニュージーランドのこと）に入植・統治をした君主の宮殿を訪ねるときにマオリの衣装を着たというところに、アーダーンがこめた強い思いがあったのだろう。若くて、未婚で、妊娠した女性が、世界のリーダーたちの集まるイギリス女王の晩餐会に、釣り番組の司会者であるパートナーを同伴して出席した。ドラマ『ダウントン・アビリー』に出てきそうな、反逆的行為にもみえる。

アーダーンは乾杯の挨拶をする名誉を受けた。カフ・フルフルを着たアーダーンが立つ。イギリス君主の巨大な肖像画を背景に、マオリのことわざを紹介した。「ヘ・アハ・テ・メア・ヌイ・オ・テ・アオ?（世界でいちばん大切なものはなんでしょう?）」ヘ・タンガタ・ヘ・タンガタ・ヘ・タンガタ（それは人です。それは人です。それは人です）」女王の晩餐会がテレビで放送されることはほとんどないが、アーダーンのおかげで、二〇一八年の晩餐会は例外となった。アーダーンとゲイフォードの写真はSNSで何千回もシェアされた。ニュージーランド国民は、悪いことではなくいいことで「バズる」ことのできる首相を誇りに思った。アメリカやイギリスやオーストラリアの人々は、その写真をシェアしつつ、自分たちのリーダーはなにをやっているんだと批判し

た。アーダーンと労働党は受け入れられないと頑なにいいはっていた人々も、小さな国が世界の舞台でここまでのことをなしとげたのだ、と認めざるをえなかった。政治のあれこれは別として、すばらしい写真だった。

ニュージーランドの歴史を必修科目に

同じ月、政府は長年検討してきた問題について決定したことを発表した。ニュージーランドの歴史を教育要綱に加え、二〇二二年までに必修科目とすること。すべての学生は、この国にはマオリが先に住んでいて、あとからイギリス人がやってきたことや、マオリ戦争のこと、そしてこの国がどのように形作られたかを学ぶことになる。この発表は広く歓迎された。もともと、年配の人々は、自分たちが昔学んだことが必ずしも正しくなかったという事実を受け入れがたく感じているようだ。アーダーン自身はファウンテン先生からもっと詳しいニュージーランドの歴史を学んでいたが、そういう人は決して多くない。

ニュージーランド アーダーン首相 世界を動かす共感力
マデリン・チャップマン 著／西田佳子 訳

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 価：2,000円（10%税込）
発売日：2021 年 11 月 26 日
I S B N：978-4-7976-7403-3

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)